日本フィル「被災地に音楽を」訪問コンサート　レポート

＜ 第14号 ＞
2012年10月

発行:(財)日本フィルハーモニー交響楽団 〒166－0011 東京都杉並区梅里 1-6-1 TEL 03-5378-6311 FAX 03-5378-6161

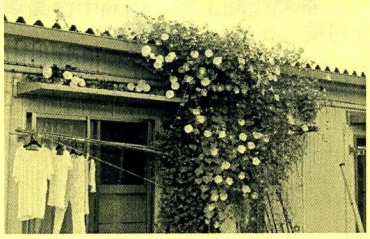
【福島市の学校や「飯館村」の仮設住宅へ行きました】

福島県の飯館村といえば、原発爆発事故から2ケ月後の5月に、町役場が苦渋の決断をして「全村避難」を行った村です。日本で一番美しい村をめざし、「までい（真手＝ゆっくりとていねいに）を合言葉に村の特性を生かした農産物をつくり、3 世代が同居する村づくりをすすめてきた「先進的な」村でした。事故からすぐに原発近辺から避難した人々を受け入れ、その後村の汚染が極端に高いことを知らされ、逃げ遅れた地域です。それだけで、どんなに悔しい思いをされただろうと想像できますが、「飯館村の仮設住宅」へ音楽を送ることを主な目的に、9月19日～21日まで福島市で5ケ所のコンサートを行ってきました。

演奏メンバーは全員ＯＢの弦楽四重奏メンバー。ヴァイオリン三本克郎、辻野順子、ヴィオラ山下進三、チェロ奈切敏郎のみなさんです。山下、奈切両氏は福島県出身です。

19 日は午後1時半から飯坂温泉に近い福島市立平野中学校（230 人）でコンサート。隣の平野小学校から3年生以上 200 人の児童も参加しました。この日は 9 月中旬というのにまだ会場の体育館はかなり暑かったのですが、プロの演奏家のコンサートははじめてとのことで、小さな子供達も集中して聴いてくれました。モーツァルト：ディベルティメントやハイドン「ひばり」、寺原伸夫：日本民謡の 3 曲のほか、子どもたちの好きなジブリ作品「君をのせて」「天空の城ラピュタ」などを演奏しました。最後は校歌と「ビリーブ」元気な声が体育館に響きました。

夜は、昨年もコーディネートをしてくださった福島県商工会協議会県北支部の職員の皆さんのためのコンサートを福島市音楽堂の小ホールで行いました。職員のみなさんは商行業者の経営支援や福祉増進など地域振興事業を行っています。震災以降、お客さんの減少や風評被害などで苦労されている地元商工業者の相談窓口を担っています。家族をかかえながら福島にとどまり、地域のことを考える職員のみなさんも放射能汚染についてはどうにも対処できないという苦悩を抱えていました。「音楽の力」に励まされた、と感想をいただきました。

20 日は飯館村の方々が避難されている松川工業団地仮設住宅へ。朝 10 時半からと午後3時からの2回のコンサートを行いました。住民のみなさんは平均年齢が 80 歳という高齢者が多く、多くの方が家族と離ればなれに暮らしていました。仮設住宅自治会は活発な活動をされていて、健康相談や昼食会などを頻繁に行われ、また端切れ布を使った工作品をつくって販売するなど、「生きがいづくり」も積極的に行っていました。リーダーの佐野さんは、村のすすめる「若妻の翼」事業で、村に嫁いだお嫁さんたちとヨーロッパ旅行も行った経験の持ち主。村では仲間たちとピアノを買い、コンサートも開いてきたそうです。コンサートにはその時の仲間たちもたくさん駆けつけてくださいました。集会所は 50 人くらいの入場者で 2 回とも満員でした。目の前で聞く弦楽器の調べに浸っていただきました。ビートルズの「ヘイ・ジュード」や「イエスタディ」「ミシェル」も好評でした。

1 回目と 2 回目の間に2時間ほどの休憩時間があり、私たちは空き家となった仮設住宅の一部屋で休憩しました。狭苦しく、薄い壁、床からは風が吹き抜け、本当に「仮」の住まいを実感させるものでした。この間に住民のみなさんと会話をしました。子どもや孫と会えない寂しさや生活の中に緑を育てる喜びがないこと、毎日犬に餌をやりに飯館にかえっていること、飯館にはイノシシが増えたがエサがないからやせ細っていること、猿がいなくなったことなどたくさん語ってくださいました。人懐こく親切な人々で、帰る頃にはおいしい栗ごはんを炊いてくださり、名残惜しい別れをしました。「また来ます！」とメンバー全員が約束しました。